

書 評

基礎の生化学（第3版） ▶ 猪飼 篤 著

基礎の生化学（第3版）／東京化学同人 2021／A5判
228ページ 2,200円＋税

著者の猪飼篤先生は、私が大学に入学した頃に教授として教鞭を取られていた先生であり、一見強面の先生であった。しかし、その後色々ご指導頂き、何と学生思いの優しい先生なんだろうかと感じるに至った。本書では、そのような著者の、読者に対する優しさが満ちた本であるという印象を第一に抱いた。所々に挿入されているユニークな絵、語りかけるような口調に、本書を手にとった初学者を引っ張っていきとうという、著者の強い思いを感じる。

基礎的な入門書であることから、まずは生化学という学問が、日常生活から感じられる事象に対してどのような視点を与えうるのかが記載されており、読者の興味を強く引きつける。また、その後どのような展開を見せてくれるのかと、小説のような面白みすら感じさせてくれる。もちろん生化学の基礎的な内容である糖質、タンパク質、脂質、核酸の話も記載されているのだが、随所に挿入されている図、そしてその図中の細かい解説も非常に分かりやすく、読者の理解をここまで助けようとしてくれるのかと、感銘を受ける。そのように、生体における構成要素を解説した後、それらを用いた酵素反応、各構成要素を合成する反応、代謝などの話になっていくのだが、それぞれの反応の結びつきも、著者の感想と共に記載されており、生化学という一見無味乾燥な分野が、実に彩り鮮やかに記載されている。また、後半にいくに従って、細胞の話、もしくは細胞同士の連絡に関する話として免疫系や神経系の話にまで言及されている。こう記載すると、内容が広範過ぎるように聞こえるかもしれないが、全て、読者の興味を惹きつける工夫をこらした上で記載されているものであり、しっ

かりと理解できるように、要点のみを効率よく記載しているので、それほどの困難はなく学習できる内容になっている。学習後に読者が振り返ってみると、生化学の入門的な話から、上記のような事柄まで理解できている自分に驚くのではないだろうか。

また、歴史的な実験に関する記載なども随所に散りばめられており、当時の時代背景から、それらの実験がもたらしてくれた画期的な知見までが、ドラマチックに記述されている。これらも、読者が興味を抱き続けた状態で本書を読破するのに役立つだろう。さらには、そのような歴史的な実験から、私がこの書評を書いている2021年8月時点でまだ世間を騒がせているSARS-CoV2にまで言及されている。

正直な所、私自身これまでに、教科書的な本をこれほどすんなりと読めた経験がなかった。教科書を読むというのは苦行であり、分かりにくい事象をあれこれと想像力を働かせながら、何とか読み進めていくものだと思っていた。それ故に、本書の書評を依頼された時も、そのような苦行をまずは思い浮かべ、猪飼先生への恩返しのつもりで、読破するつもりであった。しかし、実際には、恩返しどころか、さらに猪飼先生に恩を受けてしまったと思ったほどである。本書をこれほど分かりやすく、かつ発展的な内容にまで高められた猪飼先生の努力には頭が下がる思いだ。

また、本書は、既に生化学をある程度マスターしている方々にも、新鮮な知見を与えてくれる内容になっていると思うので、初学者ではない方にも、是非一読してもらいたい本である。学生達が手に取ってくれることを願いつつ、私も研究室の本棚に目立つように置いておこうかと思う。

（前田純宏 慶應義塾大学医学部）